

2. 【現在までの研究状況】(図表を含めてもよいので、わかりやすく記述してください。様式の変更・追加は不可(以下同様))

- ① これまでの研究の背景、問題点、解決方策、研究目的、研究方法、特色と独創的な点について当該分野の重要文献を挙げて記述してください。
- ② 申請者のこれまでの研究経過及び得られた結果について、問題点を含め①で記載したことと関連づけて説明してください。なお、これまでの研究結果を論文あるいは学会等で発表している場合には、申請者が担当した部分を明らかにして、それらの内容を記述してください。

研究の背景

顔は社会の中で他者とコミュニケーションを取るために重要な信号である。申請者は、人物の顔を知覚してから、相手に対する主観的な印象の認識や、行動が現れるまでの間の**非意識的な認知処理を解明することで、顔が人の行動に与える影響を明らかにしたい**と考えている。

人と対面したとき、駅や電車内に掲示された広告を見たとき、SNS に投稿された私的な写真を見たときなど、顔を見るとその人に対する様々な印象を抱くことがある (Dion et al., 1972)。さらに、どのような印象の顔を知覚したかによって、行動は変化することがある。例えば Wang et al. (2015) では、外見が魅力的な顔を知覚した実験参加者は、標準的あるいはそれ以下の魅力の顔を知覚した実験参加者よりも、道徳的に良い行動をすることが示された。このような傾向は経済ゲーム (Farrelly et al., 2007) や、シナリオを用いた場面想定法 (Bhagal et al., 2016) においても一貫して見られている。

問題点・解決方策

道徳的な行動は社会的望ましさの考慮から、非意識的なレベルでの認識と実際の行動が一致しない可能性がある (Gawronski & Bodenhausen, 2006)。一方、道徳的な行動は意識的な熟慮によってだけでなく、非意識的なプロセスによって生じていることが考えられている (Haidt, 2007)。しかし、従来の研究は実験参加者が行動を意図的にコントロールできる状況での検討がほとんどである。すなわち、魅力的な顔を知覚した際に道徳的に良い行動が現れることについて、**非意識的な過程で何が起きているかは検討されていない**。

そこで申請者は、外見の魅力による道徳的行動への影響は、**高魅力人物を知覚したことによって潜在的な連合の強さが変化**したことによるものである可能性に着目した。道徳的な行動は自己と道徳の潜在的連合の強さによって予測される (Perugini & Leone, 2009)。このことから、概念間の潜在的な連合の強さを測定する**潜在連合テスト** (implicit association test, IAT) が、高魅力人物を知覚してから道徳的な行動が生じるまでの非意識的な認知処理過程を捉える有効な手段となる。さらに、刺激が呈示されてから反応するまでの認知処理過程を明らかにする Ratcliff (1978) の**拡散過程モデル**を IAT に応用した。IAT は試行数が少ないため、安定した推定結果を得ることが難しいとされてきた (Klauer et al., 2007) が、階層ベイズモデリングの手法を用いることで、試行数の少ない IAT でも安定した推定を行えるようにした。これにより、反応時間から刺激の符号化や運動にかかる時間を差し引いた「情報処理の速さ」を明らかにし、自己と道徳の潜在的な連合の強さを推定することができた。

研究目的

本研究の目的は、**知覚した顔画像の外見的魅力によって自己と道徳の連合が変容するの**かを解明することである。また、潜在的な連合が生成された認知メカニズムをより詳しく検討するため、知覚した顔画像の外見的魅力によって課題に必要な情報処理の速さに違いが見られるかを明らかにする。

人物の魅力度が潜在的な道徳態度に影響する可能性(研究業績(4)-3)

方法 潜在的な道徳態度の変化を捉えるため、複数の画像を5分間観察する前後で IAT を実施した。

- ① **事前セッション**：実験参加者の自分カテゴリー (e.g., 私は、自分の) と道徳のカテゴリー (e.g., 正義、公平) の潜在的な連合の強さを IAT によって測定した。図 1 のように、画面上部に 4 つのカテゴリーを呈示した。実験参加者は、画面中央に呈示された語句が左右どちらのカテゴリーに属するかをキー押しで回答した。
- ② **画像観察セッション**：参加者は連続的に呈示される画像を見て、同一画像が繰り返し呈示された際にスペースキーを押した。観察時間はおおよそ 5 分間であった。参加者を 3 群に分け、高魅力人物・低魅力人物・家 (統制条件) のいずれかを呈示した。人物の魅力度は事前に Web 調査で測定された。
- ③ **事後セッション**：事前テストセッションと同様に IAT を行い、事前セッションとの比較することで、観察した画像によって潜在的な連

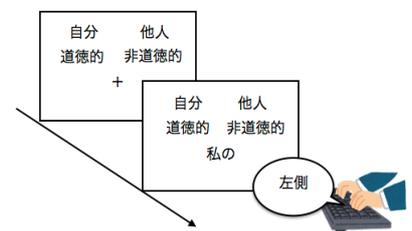


図 1. IAT (自分と道徳の潜在的な連合を測るブロック) の手続き。この例では、呈示された「私の」が「自分」カテゴリー (左側) に属する語句なので、左側のキーを押す。

(現在までの研究状況の続き)

合の強さに変化が現れるかを検討した。

結果 高魅力人物を観察した後で、低魅力人物を観察した後よりも自分・非道徳的カテゴリーに対する情報処理が速くなった(図2)。つまり、**自分カテゴリーと非道徳的カテゴリーの潜在的な連合が強くなった**。家画像を観察する前後では、自分・道徳的カテゴリーにおいても、自分・非道徳的カテゴリーにおいても、情報処理の速さは変化しなかった。したがって、意識的には外見が魅力的な人物に対して道徳的な行動をすることが先行研究からわかっていたが、本研究から**非意識的な認知処理過程では、魅力的な人物に対して非道徳的になる可能性が明らかとなった**。

特色と独創的な点

従来の研究では、主として外見が魅力的な人物の存在は行動の意識的側面にどう影響するかが検討されてきた。本研究はIATを用いることで、魅力的な顔が知覚されてから行動が生じるまでの**非意識的な認知処理過程を明らかにした**。拡散過程モデルを仮定して階層ベイズモデリングの手法を用いて分析することで、試行数の少ないIATでも、単純な反応時間だけではわからない純粋な情報処理の速さを推定し、潜在的な連合の強さの変化を捉えることができた。

※ 上記の研究は計画の立案、データの収集と分析、研究発表の全てにおいて申請者が中心となって進められた。

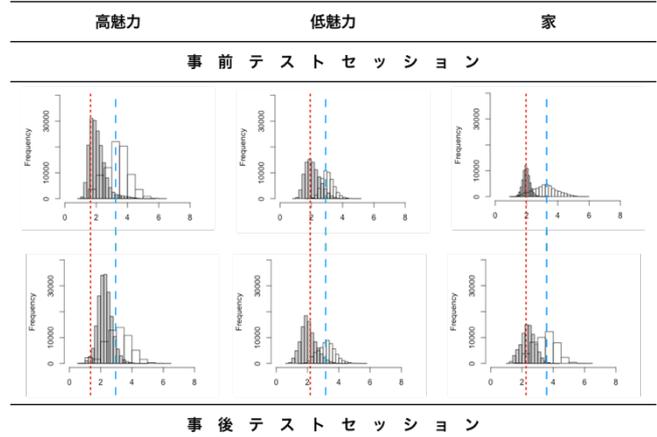


図2. 事前テストセッションと事後テストセッションにおける推定された情報処理の速さのヒストグラム。白が自分・道徳的カテゴリーの連合、黒が自分・非道徳的カテゴリーの連合の強さを示す。

3. 【これからの研究計画】

(1) 研究の背景

2. で述べた研究状況を踏まえ、これからの研究計画の背景、問題点、解決すべき点、着想に至った経緯等について参考文献を挙げて記入してください。

背景

遠くに知人がいると思って近づいてみると、実際は全然知らない人だったということは日常的に経験する。この現象は、距離の増加に伴って顔の視覚情報(解像度)が乏しくなるからだと考えられる(Loftus & Harley, 2005)。このように視覚情報の質が顔の認識に与える影響は、顔のマッチング課題(e.g., Bindeman et al., 2013)や記憶課題(e.g., Kalmel, 2016)によって検討されてきた。しかし、これまでそれぞれの課題で個別に検討・報告されている研究知見は、必ずしも整合的ではない。例えば、**顔の認識における視覚情報の質の効果は、何を判断するかによって異なる**。マッチング課題では、2つの顔が同一人物であると回答するときは解像度が低下するにつれて正答率が下がるが、同一人物でないとき解像度が少し低下しただけで急激に正答率が下がる。一方、記憶課題では、何を回答するか(old/new)に関わらず解像度が低下するにつれて正答率が下がる。

問題点・解決すべき点

顔の認識に関する現状の研究知見には以上のような矛盾が存在しているが、それらを総合的に説明するモデルは存在していない。また、それを構築する試みが十分に行われているとは言えない。この問題を解決するために、申請者は以下の2つの事柄について検討するべきだと考えている。まず、**判断内容によって視覚情報の質の効果が異なるのは顔特異的な現象か**を確認する必要がある。正立・倒立顔画像と風景画像を比較することによって、顔特異性について検討する。次に、**この相違が何によって生じているのか**を特定する必要がある。マッチング課題と記憶課題の主な違いである時間的要因に着目し、知覚されるタイミングの違いによって視覚情報の質の効果が異なるかどうかを検討する。

着想に至った経緯等

人は近くににいる人物の印象だけでなく、遠くにいる人物の印象も素早く形成できる(Bar et al., 2006)。なぜこれが可能であるのか、情報量が乏しい状態で顔が知覚されてから印象形成に至るまでにどのような認知処理が行われているのかを明らかにしたいと思い、本計画の立案に至った。

(2) 研究目的・内容 (図表を含めてもよいので、わかりやすく記述してください。)

- ① 研究目的、研究方法、研究内容について記述してください。
- ② どのような計画で、何を、どこまで明らかにしようとするのか、具体的に記入してください。
- ③ 所属研究室の研究との関連において、申請者が担当する部分を明らかにしてください。
- ④ 研究計画の期間中に異なった研究機関 (外国の研究機関等を含む。) において研究に従事することを予定している場合はその旨を記載してください。

研究目的

視覚情報の質と顔の認識の関係が何を判断するかによって異なるのは、顔特異的な現象であるかどうかを明らかにする。さらに、判断内容による顔の視覚情報の効果の相違がどのような要因によって生じているのかを、時間的要因の観点から解明する。

研究方法と内容

以上の目的を達成するため、以下の2つの研究を行う。

研究 A では、何を判断するかによって視覚情報の質の影響が異なることは、顔特異的な現象であるかどうかを、顔画像 (正立顔・倒立顔) と風景画像を比較することで明らかにする。

研究 B では、マッチング課題と記憶課題の違いは、2つの刺激を同時に知覚するか継時的に知覚するかであることに着目し、画像の呈示間隔の増加に伴って判断内容による視覚情報の質の影響が変化するかどうかを検討する。

研究 A：マッチング及び記憶課題における視覚情報の質の効果の顔特異性の検討

目的 画像のマッチング課題と記憶課題において、何を判断するかによって視覚情報の質の影響が異なる現象は顔特異的であるかどうかを検討する。

方法 **マッチング課題** では、実験参加者は画面に同時呈示された2つの画像が一致しているかどうか (一致・不一致) を判断する。同時呈示される2つの画像の内、1つは常に高解像度画像 (72 ピクセル) である。もう1つは高解像度画像か、高解像度画像と同じサイズに引き伸ばした低解像度画像である。**記憶課題** では、実験参加者はテストフェーズで呈示された風景画像が学習フェーズで呈示されたものかどうか (old / new) を判断する。学習フェーズで呈示される風景画像は常に高解像度画像 (72 ピクセル) である。テストフェーズで呈示される画像は高解像度画像か、高解像度画像と同じサイズに引き伸ばした低解像度画像である。

いずれの課題においても、顔画像 (正立顔・倒立顔) と風景画像 (統制条件) を使用する。また、低解像度画像は Bindeman et al. (2013) に合わせて3種類 (20、14、8 ピクセル) 用意する。

内容 正立顔画像の場合と倒立顔・風景画像の場合では、何を判断するか (一致・不一致、old / new) による視覚情報の質の影響は異なることが予測される。正立顔画像でのマッチング課題では、一致のときは解像度が低下するにつれて正答率が下がるが、不一致のときは解像度が少し低下しただけで急激に正答率が下がると考えられる。一方、記憶課題では、判断内容に関わらず解像度が低下するにつれて正答率が下がると考えられる。風景画像の場合は、同時比較と記憶で用いる表象の形式は類似している (Wolfe & Kuzmova, 2011) ことから、正立顔画像で見られるような判断内容による視覚情報の質の効果は見られない可能性がある。また、倒立顔においても効果は見られないと考えられる。

研究 B：顔画像の知覚タイミングと視覚情報の質が顔の認識に与える影響

目的 顔画像の知覚タイミング (同時呈示・継時呈示) と視覚情報の質が顔の認識成績に与える影響を明らかにする。

方法 画像の1回目の呈示と2回目の呈示の間を何回開けるかを、0回 (同時呈示) から設定した記憶課題を実施する。実験参加者は、呈示された画像が系列の中で既に呈示されたものかどうか (old / new) を回答する。同時呈示の場合は、2つの画像が一致するかどうか (一致・不一致) を判断する。系列の中で2回同じ画像が呈示されるが、その内1回目は常に高解像度画像 (72 ピクセル) である。2回目は高解像度画像か、高解像度画像と同じサイズに引き伸ばした低解像度画像 (20、14、8 ピクセル) である。また、時間間隔が0の場合の呈示画像の解像度の組み合わせは研究 A と同様である。加えて、画像の種類においても、研究 A と同様に正立・倒立顔画像と風景画像 (統制条件) を使用する。

内容 画像の呈示間隔が同時呈示から増えていくにつれて、認識にどのような影響を与えるかを判断内容ごとに検討する。正立顔画像において、同時呈示のときの不一致は解像度が少し低下しただけで急激に正答率が下がると考えられる。しかし、画像の1回目と2回目が呈示される時間間隔が増加するにつれて、正答率の低下は線形になっていく可能性がある。一方、顔画像の同時呈示で一致する場合や、倒立顔、風景画像の同時呈示の正答率は時間間隔が増加しても変わらないと予測される。

(3) 研究の特色・独創的な点

次の項目について記載してください。

- ① これまでの先行研究等があれば、それらと比較して、本研究の特色、着眼点、独創的な点
- ② 国内外の関連する研究の中での当該研究の位置づけ、意義
- ③ 本研究が完成したとき予想されるインパクト及び将来の見通し

本研究の特色、着眼点、独創的な点

【特色】 視覚情報の質が顔認識に与える影響について、1つの研究計画の中で統合的に検討する。

【着眼点】 これまで解明されていなかった、視覚情報の質と顔認識の関係が何を判断するかによって一致しない要因が何かを明らかにする。その際、マッチング課題と記憶課題の主な違いである**時間的**要因に着目して取り組んでいく。

【独創的な点】 相手とどれくらい離れているかによって顔の認識が難しくなる日常的な現象について、視覚情報の質の変化という知覚レベルの要因から捉えていく。

研究の位置づけ、意義

これまで、マッチング課題における顔の認識と記憶課題における顔の認識は独立して検討されてきた。そのため、何を判断するかによって視覚情報の質の効果が研究によって異なる理由の特定が困難であった。本研究はこの問題を解決し、人の顔認識における判断内容の重要性を明らかにすることを通して、**顔の認知プロセスのさらなる明確化**を目指す。

研究のインパクト及び将来の見通し

本研究は、距離によって変化する顔の視覚情報が顔認識にどのように影響するかを明らかにする基礎研究である。本研究で得られた知見は、現実の対人場面における顔認識だけでなく、仮想現実内での顔認識についての理解の手助けにもなると考えている。VRゲームのような仮想現実内で、見る人にどのような体験をさせるかによってキャラクターの見せ方を工夫する必要があるだろう。本研究は、より効果的な見せ方の検討に応用させることができる。

(4) 年次計画

申請時点から採用までの準備状況を踏まえ、DC1申請者は1～3年目、DC2申請者は1～2年目について、年次毎に記載してください。元の枠に収まっていれば、年次毎の配分は変更して構いません。

図3(次頁)に年次計画の概要を示す。

(申請時点から採用までの準備)

実験に用いる顔画像及び風景画像セットの作成を行う。顔画像(正立顔及び倒立顔)は、顔の部分のみを切り取ったニュートラル表情のものを使用する。性別は男性女性が同数になるようにする。また、顔の魅力度が記憶成績に影響することがわかっている(Tsukiura & Cabeza, 2011)ことから、事前に魅力度の測定を行い、顔の魅力度は中程度で統一する。風景画像は、Wolfe & Kuzmova (2011)と同様に、屋内外の風景画像(寝室、オフィス、道路、ビーチなど)を利用する。顔画像と風景画像の解像度の編集は、画像の輝度コントラストの調整を行ってから実施する。

(1年目)

研究A: マッチング及び記憶課題における視覚情報の質の効果の顔特異性の検討

1年目は研究Aに取り掛かる。前半はマッチング課題を実施する。まず初めに、実験の作成及び実験条件の最適化を行う。条件の最適化では、特に画像の呈示時間と、2つの画像が視野内に収まるように画面上の呈示位置を調整し、解像度の変化のみが課題成績に影響するようにする。また、実験時間が長くても1時間ほどで済むよう、試行数に留意する。本実験を実施する前には予備実験を行い、呈示時間と画面上の配置に問題がないかを確認する。

後半から2年目の前半にかけて、記憶課題を実施する。初めに、実験の作成及び実験条件の最適化を行う。条件の最適化では、特に画像の呈示時間と学習フェーズでの試行数を調整し、解像度の変化のみが課題成績に影響するようにする。本実験を実施する前には予備実験を行う。呈示時間と学習フェーズの試行数が課題遂行に十分であるか、テストフェーズも含めた合計実験時間は長すぎないかを確認する。

(2年目)

研究B: 顔画像の知覚タイミングと視覚情報の質が顔の認識に与える影響

2年目は研究Bに取り掛かる。初めに、課題の作成及び実験条件の最適化を行う。画像の呈示時間や画面上の呈示位置、そして1回目と2回目の呈示間隔の調整を行う。解像度の変化以外の不要な難易度が付け加えられないようにパラメーターの操作を行う。また、実験参加者の負担をなるべく軽減するため、実験時間があまりにも長くなりすぎないように留意する。本実験前には必ず予備実験を行

(年次計画の続き)

い、実験操作が上手くできているか、実験時間はどれくらいかかるかを確認する。

研究 A 及び研究 B で得られた研究成果について、学会発表と論文投稿を適時行う。

| 前年度 (D1) | 1年目 (D2) | 2年目 (D3) | |
|---|--|---|--|
| 顔画像・風景画像の準備 ・輝度コントラストの調整 ・解像度の操作 ・顔画像の切り抜き ・顔画像の魅力度の測定 | 研究A (マッチング課題) ・実験の作成 ・予備実験 ・本実験 ・成果報告 | 研究A (記憶課題) ・実験の作成 ・予備実験 ・本実験 ・成果報告 | 研究B ・実験の作成 ・予備実験 ・本実験 ・成果報告 |

図 3. 年次計画概要

(3年目) (DC2申請者は記入しないでください。)

(5) 人権の保護及び法令等の遵守への対応

本欄には、研究計画を遂行するにあたって、相手方の同意・協力を必要とする研究、個人情報の取り扱いの配慮を必要とする研究、生命倫理・安全対策に対する取組を必要とする研究など法令等に基づく手続きが必要な研究が含まれている場合に、どのような対策と措置を講じるのか記述してください。例えば、個人情報を伴うアンケート調査・インタビュー調査、国内外の文化遺産の調査等、提供を受けた試料の使用、侵襲性を伴う研究、ヒト遺伝子解析研究、遺伝子組換え実験、動物実験など、研究機関内外の情報委員会や倫理委員会等における承認手続きが必要となる調査・研究・実験などが対象となりますので手続きの状況も具体的に記述してください。

なお、該当しない場合には、その旨記述してください。

申請者の研究計画では、人を対象として反応時間や正答率などの行動指標を用いた心理学実験を行う。実験を実施する際は事前に関西学院大学「人を対象とする行動学系研究」倫理委員会の承認を受ける。実験参加者への配慮と個人情報の管理について以下に示す。

実験参加者への配慮

- 予め実験の目的、手順、所要時間について説明をする。
- 実験中に適宜休憩を取ることで疲労に十分配慮し、実験参加者の状態に問題がある場合には直ちに実験を中断する。
- 実験についての疑問に対して回答する。
- 実験への参加は自由意志に基づくものであるため、実験参加者が実験の中止を申し出た場合には理由の如何に関わらず直ちに実験を中止する。それによって実験参加者が不利益を被ることはない。

個人情報の管理

- 記録された実験データは個人が特定できないような形で統計的に処理する。
- 実験データは研究活動（学会発表・論文など）以外で使用されない。
- 実験内で得られた個人情報は厳重に保管する。

以上の内容について実験開始前に実験参加者に対して説明をする。同意が得られた場合、実験参加者は実験参加協力同意書に署名する。

4. 【研究成果等】(下記の項目について申請者が中心的な役割を果たしたもののみ項目に区分して記載してください。その際、通し番号を付すこととし、該当がない項目は「なし」と記載してください。申請者にアンダーラインを付してください。論文数・学会発表等の回数が多くて記載しきれない場合には、主要なものを抜粋し、各項目の最後に「他〇報」等と記載してください。【査読中・投稿中のものは除く】)

(1) 学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文、著書(査読の有無を区分して記載してください。査読のある場合、印刷済及び採録決定済のものに限ります。)

著者(申請者を含む全員の氏名(最大20名程度)を、論文と同一の順番で記載してください。)、題名、掲載誌名、発行所、巻号、pp 開始頁-最終頁、発行年をこの順で記入してください。

(2) 学術雑誌等又は商業誌における解説、総説

(3) 国際会議における発表(口頭・ポスターの別、査読の有無を区分して記載してください。)

著者(申請者を含む全員の氏名(最大20名程度)を、論文等と同一の順番で記載してください。)、題名、発表した学会名、論文等の番号、場所、月・年を記載してください。発表者に〇印を付してください。(発表予定のものは除く。ただし、発表申し込みが受理されたものは記載しても構いません。)

(4) 国内学会・シンポジウム等における発表

(3)と同様に記載してください。

(5) 特許等(申請中、公開中、取得を明記してください。ただし、申請中のもので詳細を記述できない場合は概要のみの記述で構いません。)

(6) その他(受賞歴等)

(1) 学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文、著書

【 査読なし・論文集 】

1. 西村友佳・中谷勝哉. デルブーフ錯視はなぜ生じるのか. *Technical Report on Attention and Cognition*, 「注意と認知」研究会, No.25, pp. 51-51, 2016.
2. 西村友佳・小川洋和. 潜在的態度の変化に対する魅力的な顔の効果. *Technical Report on Attention and Cognition*, 「注意と認知」研究会, No.21, pp. 41-42, 2017.

(2) 学術雑誌等又は商業誌における解説、総説

なし

(3) 国際会議における発表

【 査読あり・口頭発表 】

1. ○Nishimura, Y., & Ogawa, H. Exposure to attractive faces modulates implicit moral attitude. The 2017 Annual Conference of the Korean Society for Cognitive and Biological Psychology, Pusan National University, Korea, January, 2017.

(4) 国内学会・シンポジウム等における発表

【 査読なし・口頭発表 】

1. ○西村友佳・中谷勝哉. デルブーフ錯視はなぜ生じるのか. 日本心理学会「注意と認知」研究会, 第14回合宿研究会, ホテルサンルートプラザ名古屋, 2016年3月.
2. ○西村友佳・小川洋和. 潜在的態度の変化に対する魅力的な顔の効果. 日本心理学会「注意と認知」研究会, 第15回合宿研究会, ホテルサンルートプラザ名古屋, 2017年3月.
3. ○西村友佳. 他者の魅力度は潜在的道德態度に影響するか. 関西若手実験心理学研究会第37回研究会, 京都大学, 2017年11月.

【 査読なし・ポスター発表 】

4. ○西村友佳・小川洋和. 他者の魅力度は感情状態と独立して潜在的道德態度に影響する. 日本心理学会第81回大会, 久留米シティプラザ, 2017年9月.

(5) 特許等

なし

(6) その他

【 給付型奨学金 】

1. 近畿大学総合社会学部 学業成績優秀者対象特待生(授業料半額免除), 2013, 2014年度.
2. 近畿大学 支給奨学金(年額30万円), 2015年度.
3. 関西学院大学 ベーツ第1種支給奨学金(34万円), 2016, 2017年度.
4. 関西学院大学 大学院博士課程後期課程研究奨励金(学費相当額), 2018年度.

【 受賞歴 】

5. 近畿大学 学部長賞, 2016年3月.

【 発表助成 】

6. 日本認知心理学会「韓国認知生物心理学会への発表支援」. 日本認知心理学会, 2017年.

申請者登録名 西村 友佳

5. 【研究者を志望する動機、目指す研究者像、自己の長所等】

日本学術振興会特別研究員制度は、我が国の学術研究の将来を担う創造性に富んだ研究者の養成・確保に資することを目的としています。この目的に鑑み、申請者本人の研究者としての資質、研究計画遂行能力を評価するために以下の事項をそれぞれ記入してください。

- ① 研究者を志望する動機、目指す研究者像、自己の長所等
- ② その他、研究者としての資質、研究計画遂行能力を審査員が評価する上で、特に重要と思われる事項（特に優れた学業成績、受賞歴、飛び級入学、留学経験、特色ある学外活動など）

研究者を志望する動機

申請者が研究者を志望する動機は、「**モノの見え方、世界の見え方、感じ方の不思議を探求していきたい**」と思っているからである。人は目に映っているはずのものが見えていないことがあるが、何が見えて、何が見えていないかは人によって違うだろう。同じことを経験しても、人によってどのような解釈をするか、どのような印象を抱くかは様々だ。つまり、あなたが見ている世界と私が見ている世界は、同じようで違うのである。では、**一体何が各人の「私の世界」を作り上げているのだろうか**。この問いに真っ向から挑戦することができる分野が心理学であると信じている。申請者は、心理学と出会ったことで幼少の頃から不思議に思っていたことを探究する術を知り、本当に幸せに思っている。そしてこれからも、心理学を通じて申請者が知りたい問いについて探求していきたい。以上が、申請者が研究職を志望する動機である。

目指す研究者像

申請者は**日常に対する鋭い観察眼を持った研究者**を目指している。人がどのようにモノを見ているのか、どのように世界を見て何を感じるのかについて考えていく上では、統制された実験室での行動を観察しているだけでは不十分である。なぜなら、人が生活している環境では様々なことが同時に起こり、それらが相互作用し合っって人の行動に影響しているからだ。したがって、実験室の中だけでなく、人が日頃生活している環境の中で世界がどう見えるのかを説明することができて、初めて申請者が知りたい問いに答えられたことになるだろう。そのためには、日常の中に潜む不思議な現象を見落とさず、当たり前だと思っていることが本当に当たり前なのかを疑える観察眼が必要である。**実生活の中から問題を見出し、心理学の手法を用いて解明する**という研究スタイルにより学術的成果を挙げていくことで、社会に貢献できる研究者になりたい。

自己の長所等

申請者の長所は大きく2つある。

- ① 1つ目は、**物事に対して根気強く取り組める**ところである。申請者は小学校1年のときから13年間書道教室に通った。思ったように書けなくても、諦めずに稽古を続けた結果、老若男女を対象に毛筆の指導をすることができる資格を取得することができた（事項3）。申請者は以上のような経験から、継続は本当に力となることを学び、苦手なことであっても最後まで諦めず、根気強く継続して取り組むことができるようになった。その結果、IATに関する知識の学習や、ベイズ統計モデリングの手法を用いた拡散過程モデル推定の技術の習得に根気強く励むことができ、研究成果を得ることができた。
- ② 2つ目は、**好奇心が旺盛**なところである。申請者は学内で開催される研究会だけでなく、学外で開催される学会・研究会等に参加地域を問わず積極的に参加し、見識を深める努力をしている。2017年1月には、韓国認知生物心理学会の年次大会に参加するために、単身韓国・釜山へ飛んだ（研究業績(3)）。また、関西圏の実験心理学分野の若手研究者が集う「関西若手実験心理学研究会」には学部生の頃から継続的に参加している。

自己評価する上で、特に重要と思われる事項（「自己の長所等」の根拠となる事項等）

【特に優れた学業成績】

1. 近畿大学総合社会学部では学業成績が優秀であると認められ、2年、3年、4年時に授業料の免除を受けた（研究業績(6)-1,2）。また、卒業時には**学部長賞を受賞**した（研究業績(6)-5）。
2. 1.と同様に、関西学院大学文学研究科でも学業成績が特に優秀で学問研究に熱意を有する者として認められ、ベーツ第1種支給奨学金を得ることができた（研究業績(6)-3）。また、**研究能力が特に優れており、研究成果が期待できる者として認められ**、大学院博士課程後期課程研究奨励金に採用された（研究業績(6)-4）。

【特色ある学外活動】

3. 公益財団法人日本習字教育財団に属する書道教室に13年間通い、書道の指導資格を取得した（2013年8月 公益財団法人日本習字教育財団 漢字部門教授）。